

子規漢詩に見る女性観

何 美娜

はじめに

明治三十五年、数え年三十六歳の若さで他界した正岡子規は生涯結婚しなかった。そのような人生を送った子規はいったい女性をどう見ていたのだろうか。子規の女性像と女性観を解明することは、子規像をより全面的に捉えるための欠かせない一部だと考えられる。漢詩という文学形式に出てくる女性への考察は子規の女性認識を全面的に理解するために、非常に意義のある作業である。しかし、これまで子規の女性像と女性観に目を向けた研究者は数人しかいない。特に、子規漢詩の中に出てくる女性像についての論述は皆無である。

以上の状況を踏まえて、まず、子規の女性観についての数少ない先行研究をまとめる。渡辺澄子氏は「子規の女性像」という文章の中で、「子規の女性観だが、はっきり言ってしまえば、子規は女性を観念でしかとらえていない」、「実在の女性への愛を直接に歌いあげたものはない」と述べている。また、渡辺氏によれば、子規は「母親に対し、思いやりは深いが、妹に対し、愛があるが、支配者に徹している」。

続いて、和田茂樹氏は「子規と女性像」の中で、子規を巡っての噂話や後日談など、主に子規の俳句を通じて、子規と女性とのエピソードを四つ挙げている。その女性たちでは名前の明らかな女性は一名のみ、他は行きずりの小女やフィクションであると述べている。

阿木津英氏は「子規とジェンダー——女性蔑視と天然界へ向かうセクシュア

リティ」の中で、「根底に封建的な男女の上下身分差意識を温存したままのものである」、「子規のセクシュアリティは自然界に向かった」と述べている。

以上、まとめてきた通り、先学たちはそれぞれ子規の俳句、随筆、小説などの作品から子規の女性像及び女性観に関する見解を述べたが、それだけではまだ不完全だと考えられる。明治期における子規の女性への認識と作品に出てくる女性に対して、自分自身、また身辺の母と妹の投影があるかどうかについては先学が触れていないため、そこに焦点を当てながら、子規の漢詩を通して、「封建的女性軽蔑者」と異なる子規を発見できるのではないかと考える。なお、文中で引用する漢詩の通し番号は講談社版『子規全集』第八巻による。

一、閨怨詩における女性

閨怨詩^①は、中国古詩の中ではある意味独特な形式であり、若い人妻、あるいは少女の怨恨悲愁を詠うものである。また、女性が作ったものもあり、男性が女性の口ぶりで作ったものもある。閨怨とは、^{なや}閨（女性の居室）の中で、男性の来訪を待ち侘びることであり、「怨」は「怨望」、つまり心の空虚を愛によって満たされたいと願うことを意味する。正岡子規が自選した『漢詩稿』の中には宮怨詩^②を含めて、10首の閨怨詩が見られる。閨怨詩は一般的に男性が女性の内面を思いやって描いた、所謂想像の産物である。そのため、明治三十五年、数え年三十六歳の若さで他界し、恋愛らしい恋愛もせず、結婚もしなかつた子規は閨怨詩の中でどのような女性形象を築いたのか非常に興味深い。次に、子規の閨怨詩に出る女性たちを四つの種類に分けて検討していきたい。

1.1. 寂寞たる女性

まず、次にあげる子規の「閨怨詩」を見てみたい。

- 16 春残芳樹落花颺 春は芳樹に残りて 落花颺がり
無限東風涙湿裳 無限の東風 涙 裳を湿す
送別三年総無信 送別三年 総べて信無く

暁鶯声裏臥空房 暁鶯声裏 空房に臥す

「閨怨」 明治十四年

この詩の中では、「春殘」、「落花」、「東風」、「暁鶯」、「空房」などの意象を以て、離れていった恋人と三年もの間、連絡を絶っている女性の寂しさと悲しさを表わしている。特に、「空房」という詩語の「空」という字は女性の心の虚しさを巧みに映し出している。「春」「臥空房」の設定は、隋の侯夫人「自傷」詩にある「寒春入骨清、獨臥愁空房。」（寒春に入る 骨清らかになり、獨り臥す空房にて愁う。）に見られる。この一首は春の景色をもって主人公に人を慕う感情を触発させるという典型的な閨怨詩の手法を用いている。この中の女性は、自分を置き去った、愛する人に対して、怨という気持ちより、恋人が恋しく、寂しい気持ちのほうを強く持っていることが読み取れる。また、子規は「興」^③という手法も使用している。春の情景に恋人への思念が触発され、ガランとした部屋の中で涙を流す女性の姿を鮮明に浮かばせている。

同じ趣の詩としては次のものを掲げる。

- 83 残燈影冷夢相思 残燈 影冷ややかにして 夢に相思う
金鴨香消玉漏悲 金鴨 香消えて 玉漏悲し
万縷依依江上柳 万縷依依たり 江上の柳
瘦於昔日送郎時 昔日 郎を送りし時より瘦せたり

「閨怨」 明治十五年

「金鴨」とは鴨型の香炉である。「玉漏」とは中国古代の計時器である。この詩も前詩と同じく、まず、周辺の情景から描き始め、燃え尽きた灯、香を燃焼しきった香炉、また、時間をむなしく刻んでいる時計。そのような侘しい情景から、遠方にいる恋人に夢の中でさえ、会いたくて、会いたくてと、思念が募る事を表現したものである。また、「柳」という詩語はよく離別の詩に出てくる。中国では、離別するときに、柳の枝を折って、環を作り、遠方に行く人に送る習慣があって、そこには無事に帰ってほしい、離れたくないという惜別の意味がこめられている。子規が用いた「柳」も無論そのような意味を持っている。

る。もっとも注目してもらいたいのは、柳が昔恋人を送るときよりも痩せているという発想である。「柳」という植物を擬人化して、実際は詩中の女性が思念のあまり、前より非常にやつれてしまったことを述べている。この手法は南宋の有名な女流文学者、李清照の「人比黄花瘦」^④（人は黄花より痩せたり）の一句を想起させる。李の詞に出てくる女性もまた、思念に満ちた苦しみを忍んでいるため、げっそりとやつれた形象で描かれている。

以上の両詩の寂しい女性像と同じような趣向のものとしては以下のような詩がある。各首に簡単な解釈を加えながら年代順に見ていく。

191 可恨秋天雨 恨むべし 秋天の雨
可恨秋月光 恨むべし 秋月の光
残荷皆破尽 残荷 皆破れ尽くし
露出睡鴛鴦 露出す 睡鴛鴦

「閨怨三首」その一 明治十六年

この詩も秋の情景によって、女性の寂しい気持ちが引き出されたと述べている。雨に打たれ、蓮の葉は全て潰され、眠っているオシドリが見えてきたと詠んでいる。「鴛鴦」は中国古詩の中で夫婦の代名詞としてよく用いられている。「睡鴛鴦」という詩語は元の朱名世の「海鷗」にある「芰荷翻雨打鴛鴦」（芰荷雨翻りて 鴛鴦を打つ）を想起させる。この詩の中で、主人公である女性については触れていないが、二つの「恨」によって寂しさに溢れるその不満を訴えている。蓮の葉が落ちて、露出した幸せな鴛鴦という情景と対照的に、独り残されている女性の寂しさがより一層顕著になる。

続いて、次の詩を見てみよう。

192 三更独凭檻 三更 独り檻に凭れば
断雁一声残 断雁 一声残る
或恐带书到 或いは恐る 書を帯して到るも
月暗不能看 月暗くして 見る能わざらんことを

「閨怨三首」その二 明治十六年

「三更」は午前零時前後の二時間を言う。「獨凭檻」という表現は閨怨詩だけではなく、中国古詩の中で広く用いられている。「或恐帶書到、月暗不能看。」の二句は白居易の作「慵不能」の「架上非無書、眼慵不能看。」（架上に書無きに非ざ、眼慵 看ること能わず。）を連想させる。離れている、愛する人を読み、なかなか眠れず、独りで佇んでいたら、群れを離れた雁の鳴き声が聞こえたという内容である。手紙を持ってきても、なお恐れるのは、暗くてすぐに字が読めないからである。恋人の便りを待ちに待っているが、手紙が来るのもまた心配だという一人残された寂しい女性の複雑な気持ちを表わしている。

また、このような閨怨詩もある。

298 前年離別地 前年離別の地
今日更蕭条 今日更に蕭条たり
蓮墜衰紅臉 蓮墜ちて 紅臉衰え
柳枯瘦舞腰 柳枯れて 舞腰瘦せたり
不嘆鴻雁少 鴻雁少なるを嘆かず
独望海天遙 独り 海天の遥かなるを望む
明世電機在 明世 電機在り
縦横掛碧霄 縦横に 碧霄掛かる

「憶郎」 明治十七年

この詩はまた、愛する人と離れた女性を描いている。落ちていた蓮の花と枯れている柳、衰える容貌と痩せている腰、実際の風景と自身の容貌を対照しながら、寂しさによってやつれている様態を鮮明に描き出している。また、最後の二句、「明世電機在、縦横掛碧霄。」にある電機は下の句の内容と合わせてみると、おそらく、電柱にかかっている電線のことであろう。近代の事物をも詩作の中に取り入れるのは子規の大胆な試みでもある。

以上の詩例のほか、子規の二首の「宮怨詩」も同じく、女性の寂しさを強調したものとなっている。すなわち、以下のようなものである。

201 花落無声一庭静 花落ちて声無く 一庭静かなり

粉粧不施髮垂領 粉粧施さず 髪 領に垂る
晚来自起鎖窓櫺 晚来 自ら起ちて 窓櫺を鎖し
怯看月明生隻影 看るを怯る 月明 隻影を生ずるを

「宮怨」 明治十七年

202 半夜君来一笑迎 半夜 君来れば 一笑して迎え
相看欲語夢魂驚 相看着語らんと欲して夢魂驚く
不知何者破吾睡 知らず 何者か 吾が睡りを破れる
三十六宮絲竹声 三十六宮 絲竹の声

「宮怨」 明治十七年

この二首は題名の通り、宮怨詩であり、子規が自選した『漢詩稿』の中では順番がつかがっていて、また内容から見ても連作のようである。宮怨詩の女性主人公は別の閨怨詩と異なって、宮女という特定の身分がある。一首目では宮怨詩に出てくる宮女が帝王の寵愛を失い、化粧を施す気になれず、月に照らされてできた自分の孤独な影さえ見ていられないと詠んでいる。二首目では、待ちに待った帝王が来て、嬉しく迎えていこうとしている時、音楽の音で夢が覚めたと述べている。他の閨怨詩に出てくる女性の身分と異なっているが、寂寞な女性を描出する点では同じである。

以上の閨怨詩における女性たちは、すべて愛する人を思念し、寂しさに耐え続けている。そこには時間だけ空しく過ぎ、容姿が衰えていくことに悲しみながら、ずっと思い続けて待ち続けている寂寞たる女性像が描かれている。

1.2. 怨恨深い女性

同じ閨怨詩の主人公でも、以上見てきた寂寞たる女性像とやや異なっているものとしては、次のような詩が見られる。

96 軽雷送雨過幽沼 軽雷 雨を送りて 幽沼を過ぎ
涼意多処行人少 涼意多き処 行人少なり
楊柳橋頭幽莊外 楊柳の橋頭 幽莊の外

柳色吹烟烟裊裊	柳色 烟を吹きて 烟 裊々たり
熠熠残螢数点微	熠熠たる残螢 数点微かに
須臾飄瞥度釣磯	須臾にして飄瞥して 釣磯を度る
水波不起影在水	水波起こらず 影 水に在り
自照自喜頻飛飛	自ら照らし 自ら喜び 頻りに飛飛す
誰家少婦綾羅襲	誰が家の少婦か 綾羅襲い
長袖倚欄独悄立	長袖 欄に倚りて 独り悄立す
無端運歩歩歩輕	端無くも歩を運ばば 歩々軽く
不知風露衣裙湿	知らず 風露に衣裙の湿うを
水村月黑夜沈沈	水村 月黒くして 夜沈々
螢火飛來如有心	螢火飛び來たり 心有るが如し
把扇撲之則飛去	扇を把つて之を撲てば 則ち飛び去り
歸來窓下怨恨深	窓下に歸來して 怨恨深し
記曾送郎到江岸	記す曾て郎を送りて 江岸に到り
時正夏夜螢火乱	時 正に夏夜にして 螢火乱れしを
已閱一歲猶未歸	已に一歲を閲して 猶お未だ歸らず
夜夜房中夢魂斷	夜々 房中に 夢魂断つ

「撲螢詞」 明治十五年

この一首はまず、「楊柳」、「吹烟」、「残螢」などの情景描写から入り、時間帯（螢の光が見えることから夜だと分かる）と場所（第三句の「楊柳橋頭幽莊外」）を紹介してから、第八句では螢たちが楽しそうに飛んでいる景色を描いている。「独悄立」という詩語は、女性の独りで寂しく佇んでいる姿を描写している。露などによって、服が濡れていることにも気づかず、飛んでくる螢を扇子であおいで払う。そのことによって、もともと悲しい気持ちはよりいっそう増した。最後の四句によって女性の悲しさがどこからくるのかは解明される。愛する人を送るとき、あたかも今夜と同じような場所で、同じように螢が飛んでいる夏の夜であった。一年が経ったのに、彼はまだ帰ってこない。そのせいで、夜な

夜な何度も目が覚め、眠れずにいると述べている。

この詩では楽しそうな虫をうつという行動からは孤独な女性の妬みと恨みが窺える。そのような感情はさらに愛する人への恨みにも繋がっていく。子規は「怨恨深」という詩語を以て、寂寞たる女性像と異なった、どうして私だけにこのような寂しい思いをさせたのか、どうして一年も帰ってこないのかと強く思っている怨恨深い女性像を作った。

1.3. 夫思いの女性

子規の閨怨詩の中で特に際立っている詩がある。詩中に出ている「妾」という字が女性の謙遜的な自称と男の側室という二つの意味を持っている。また、主に夫に捨てられた女性を描く閨怨詩というジャンルから、ここでは妻の思いを描く詩として扱いたい。

190 荷枯鷗夢冷 荷枯れて 鷗夢冷やかに
木落鵲眠寒 木落ちて 鵲眠寒し
郎苦多妾苦 郎の苦しみは 妾の苦しみよりも多からん
磧砂立夜闌 磧砂 立ちどころに夜闌けたり

「閨怨三首」その三 明治十六年

この詩の起句と承句は景色描写である。「荷枯」はここで、単に蓮の花が枯れるという実景を描写しているだけではなく、女性の容貌が衰える意味も含めている。また、「荷枯」は中国ではよく「菊老」と併用されている。「木落」は木の葉が落ちる状態である。侘しい秋の情景を示している。秋を悲しむというのは「傷春」と同じく、閨怨詩の中によく出てくる主題である。興味深いのは第三句の「郎苦多妾苦」である。前文にもすでに述べたが、閨怨詩の主人公は女性であり、詩の主題はその女性の寂しさ、悲しさ、恨みなどである。いずれの主題の場合でも、女性が詩の中心であることは言うまでもない。しかし、子規のこの詩の中で、女性の口を通して、男性の苦しさに焦点を当てたと捉える。「郎の苦しみは 妾の苦しみよりも多からん」と言って、全詩の重点は主人公で

あるべき女性から男性のほうに傾いたと言える。

子規はこの詩の中で、寂寞な女性及び怨恨を持っている女性という形象を乗り越えて、夫への思いやりや理解などを持っている優しき賢妻という女性像を作ったのである。

1.4. 子供を持つ女性

以上示してきた閨怨詩のほか、子規には、また、一般的な閨怨詩と異なった作がある。

200 河梁分手暑寒更 河梁に手を分かちしより 暑寒更まり
児未知爺稍長成 児 未だ爺を知らず 稍や 長成せり
惱殺籠間白鸚鵡 惱殺す 籠間の白鸚鵡
如何喚妾学郎声 如何ぞ妾を喚ぶに 郎の声を学ぶ

〔閨怨〕 明治十七年

河の橋の上で別れてから熱さ寒さの季節も幾度か変わり、子供はまだ父を見知らぬまま、次第に成長した。籠の中の白鸚鵡は人を悩ませることよ。どうして夫の声を真似て私を呼ぶのか、という内容である。この詩の興味深いのは女性主人公とともにもう一人の主人公、子供を登場させるという設定である。この詩を作ったのは子規が十八歳の時である。まだ年少である子規が正統の閨怨詩と明らかに異なり、閨怨詩の中に女性だけではなく、子供も登場させたのはいったいどのような気持ちを込めているのであるか。まず、この詩の中に出てくる女性の形象をまとめる。全詩を見ると、愛する人と離れ離れになっている女性の寂しさは、子供の登場によって、少し薄められたようにも読み取れる。つまり、女性のそばに子供がいることで、夫への思念はあるとしても、ほかの閨怨詩に出てくるような寂しく悲しく、そして恨みに満ちた女性のような寂しさとは明らかに異なっている。そこには子供によって寂しい気持ちの中から少しでも救出された女性像が見られる。

以上分析してきた通り、明治十四年から十八年までは子規の漢詩が習作期か

ら第二期に転換している時期である。習作期には常に『幼学便覧』や『詩語碎金』などを手引きとして作詩に励んだ子規であり、その頃の作品には模倣の痕跡が強い。それについては清水房雄氏の研究^⑥が詳しい。しかし、模倣といっても、同じテーマの詩語からどれを選択するか、またいかなるイメージを借りてくるか、ということから子規の考えが窺える。今回、見てきたように子規は閨怨詩の中で、主に四種類の女性形象を作った。

明治十四年から十七年までに作った寂寞たる女性と怨恨深い女性という女性像は他の女性像より断然に多い。それはなぜであろう。もちろん、それは中国伝来の閨怨詩でありふれた女性像であるが、早くに父を亡くした子規は母親の寂しさが目に焼きついていて、よく理解していたからこそ、このような女性像を作ったのではないかと考えられる。また、従来、男性詩人には自分の思想をよく閨怨詩に出てくる女性に移入させ、婉曲的に訴えようとする傾向がある。そうであるならば、明治十六年、独りで上京した子規は詩中の女性たちに自分の寂しい気持ちをも込めて詠んでいる可能性も高い。

続いて、家庭の中に残されて、夫の帰りをひたすら待ち続ける、自己主張をしないという夫思いの賢妻像が子規によって作られた。そういう点から見ると、従来の閨怨詩に込められている儒家の男権主義、女性が従属的な立場に立っているという観点には、子規は同意したのであろうか。特に、「郎苦多妾苦」という一句は女性の苦しさより、男の苦しさを強調している。松山の旧士族の家庭に生まれ、早くも戸主になり、また小さい頃から儒家の経典をたくさん叩き込まれてきた子規には、儒家の男尊女卑の観念は確かに残っていたと考えられる。また、明治十六年、東京で一人奮闘している子規にとって、このような女性の男性への思いを通して、自分への慰めと励ましにしたとも捉えることができそうである。

最後に子供と一緒にいる女性像が作られた。この一首の中で、子規は女性の気持ちだけではなく、子供の寂しい気持ちにも目を向けた。それはやはり、早くに父親を亡くした子規親子の姿が投影されていると考えられる。詩中の母親

の寂しさ、そして子供としての苦しみを、子規は一番理解していた。杜甫と杜牧の立場とは異なって、詩中の子供という形象が自分自身と重なったことは考えられる。そして、この詩からは親子の寂しさ苦しみを読み取れると同時に、子供の存在によって、女性がある程度愛する人から離れた孤独感を薄められているようにも感じられる。親子がお互い慰め愛し合って寂しさを乗り越えようとするなかに、自分自身、そして家族への呼びかけも読み取ることができる。

二、貧乏で勤勉たる女性

子規は女性に対する興味は薄そうに見えるが、実は子規も意中の女性と巡り合うことを期待していた。友人犬骨坊（五百木瓢亭）の回想文、「正岡子規君」^⑥によると、明治三十八年、子規がこのようなことを書いていた。

尚ほ望むべき二事あり候

洋行と定まりし時

意中の人を得し時

の喜びいかならむ前者或は望むへし後者は全く望みなし遺憾々々（略）

子規は恋に対して消極的であり、しかも、自分に大きなコンプレックスを抱えていたように見える。小室善弘氏は「子規の漢詩はいっこうに恋愛抒情という発想にかかわらない」^⑦と指摘した。しかし、子規漢詩には恋心が透けて見えるものもある。その中に出てくる子規の理想の女性はどのような女性なのか、そして、子規が恋に対してどのようなコンプレックスを抱えていたのかは以下の漢詩を通して、考察を進めたい。まず、明治二十四年に作ったこの漢詩を掲げよう。

463 聞説八百万神会出雲 聞説 八百万神 出雲に会して

結成人間未了縁 人間未了の縁を結成すと

又聞月下氷人檢簿冊 又聞く 月下氷人 簿冊を檢して

赤繩一繫不可易	赤繩もて一たび繫がば 易うべからずと
良家少女求好迷	良家の少女 好迷を求め
新様春粧追時流	新様の春粧 時流を追う
一団香雪薔薇鈿	一団の香雪 薔薇の鈿
数点隕星金剛球	数点の隕星 金剛球
憐れむ 君 生まれて陋巷の裡に在り	憐れむ 君 生まれて陋巷の裡に在り
菽水奉親鶏鳴起	菽水親を奉じて 鶏鳴に起くるを
終日采茶茶満筐	終日 茶を采り 茶 筐に満てば
帰来家遥暮山紫	帰り来るに 家は遥かにして 暮山紫なり
更に憐れむ 容姿太だ雅嫻なるに	更に憐れむ 容姿太だ雅嫻なるに
一枝桃紅雨余斑	一枝の桃紅 雨余 斑なるに
由来応は天上種	由来応に是れ 天上の種にして
仙身暫謫落人間	仙身 暫く謫せられて 人間に落ちしなるべし
茅茨竹門多清福	茅茨竹門 清福多く
未だ知らず 世上 朱屋有るを	未だ知らず 世上 朱屋有るを
夜夜蝶夢尋春飛	夜夜蝶の夢に 春を尋ねて飛び
黄菜花間与露宿	黄菜の花間に 露とともに宿る
悪縁易結良縁難	悪縁は結び易く 良縁は難し
痴漢 時有りて 駿驄を御せども	痴漢 時有りて 駿驄を御せども
佳人 古より艶福無く	佳人 古より艶福無く
鴛瓦 霜重くして 破衣寒し	鴛瓦 霜重くして 破衣寒し
醉中遊子 名は莞爾	醉中遊子 名は莞爾
孤り栖む 黄塵十丈の裡	孤り栖む 黄塵十丈の裡
多年 神に禱るも 神 無情	多年 神に禱るも 神 無情
紅葉未だ出でず 御溝の水	紅葉未だ出でず 御溝の水
一朝 君を看て 意 相親しみ	一朝 君を看て 意 相親しみ
花朝月夕 芳魂を祭る	花朝月夕 芳魂を祭る

魂乎杳兮招不来　　魂や　杳として　招けども来らず
香煙朦朧認美人　　香煙朦朧たるに　美人を認む

「贈画裡佳人」 明治二十四年

この一首の詩形は古体詩で、詩名の通り、題画詩^⑧である。まず、詩の内容から見てみよう。前四句は日本の「八百万神」と中国の「月下氷人」^⑨をもって縁結びのことを言う。続いて、新型の春化粧をして、時代の流行を追う「良家」、つまりお金持ちの家に生まれた少女を登場させる。そのような苦勞を知らず裕福な少女と異なって、もう一人登場している少女は貧乏な家に生まれて、朝早く起きて晩までお茶を摘んで、親に仕えながら生計を立てる。彼女は上品で優雅な容姿をして、まるで、雨粒を帯びている桃の花のように愛おしい。もともとは天上の生まれなのに、暫く人間の世界に落ちているのに違いない。茅敷きの家に竹の門という粗末な暮らしにも清らかな幸せがあり、この世の中に朱色に塗られた立派な家などのあることをまだ知らない。少女は貧乏な家に生まれながら、ピュアな心をもって自然を楽しんでいる。続いて、歴史を振り返ると、悪い縁は結びやすいのに対して、良い縁は結び難い。愚かな男が時には名馬を制することもある。「鴛瓦霜重破衣寒」という表現は白居易の「長恨歌」の「鴛鴦瓦冷霜華重、翡翠衾寒誰与共。」（鴛鴦の瓦　冷ややかにして霜華　重く、翡翠の衾　寒くして　誰と共にせん。）を意識していたのであろう。ここでは、美人というものは古くから幸薄いということについて、楊貴妃の例を挙げて説明している。最後の八句は子規自身のことと言及する。「莞爾」というのは子規の号のひとつである。「私は独りで黄塵の中に住み、長年、神に祈っても神は無情で、いまだにいい因縁をくれていない。」と述べている。「紅葉未出御溝水」の「紅葉」^⑩は媒酌人の比喻である。ひとたび君を見てから、心親しんで、美しい君の魂を日夜祭っている。その魂は遥かにして招いても来なくて、ただ、香の煙のおぼろおぼろの中に美人を認めるのみなのであるという。最後のこの四句はやはり子規の消極的な心理が見られる。

この詩の中で二人の少女が出てきた。一人目はお金持ちの少女で、この少女

について、子規は「求好逑」という詩語を用いた。「好逑」というのは周知の通り、いい配偶者の意味で、『詩経』の周南の「関雎」の中に「関関雎鳩、在河之洲。窈窕淑女、君子好逑。」というの是有名である。一般的に「好逑」を求めるのは男子であるが、子規はここで少女を「好逑」を求める主体にした。つまり、一人目の少女は苦勞を知らず裕福であり、また、恋愛に対する積極的な態度を持つ女性像を持っている。

子規はなぜこのような女性像を作ったのか。それは、当時の恋愛と婚姻事情に基づいたと考えられる。子規は「今日の日本の婚姻の不都合なるは各家とも概ね琴瑟相調はず風波時に生ずるを見ても知るべし それを治療するには随意結婚となし親の干渉せざるにあり然り而して随意結婚となしには是非とも男女の交際を開かざるべからず」^⑩と自由恋愛を唱えた。当時のお見合い婚姻と恋愛制限への不満から、このような恋愛における権利を追求する女性像を作ったと考えられる。子規のこういう思想は封建社会の儒教伝統とまったく異なっている。

続いて、子規は二人目の少女に仙女のような容貌を持ち、貧乏の家庭に生まれながらも、苦を楽しみ、勤勉しながら親孝行し、世間の金銭主義など汚い風気に汚されていない女性像を与えた。しかも、漢詩の中で子規は二人目の少女に対し、好意を抱いている。つまり、この少女こそは子規の意中の女性像である。

まず、子規はどのようにして、意中の女性を貧乏に設定しなければならないのか。その考えについては、前述したように、子規は「うちのお嫁さんは田舎者でないと釣り合わない」と。子規が貧乏ということを非常に気にしている証拠である。子規の著作を見ると、常に「貧」という字を見かける。貧しいということは子規のコンプレックスとも見える。しかしながら、「貧に誇る我に月の如き宝珠あり」という子規の俳句のように、子規は「貧」という状態を楽しんでいる。子規の貧乏に対するこういう楽観的な考えを詩中の二人目の少女に投影していると考えられる。

この一首の中で、子規は文明開化の時代に、女性の恋愛と婚姻における平等な権利を認めている。そういう考えは自分の妹である律から啓発されたとも考えられる。それについては、後文に言及する。また一方で、意中の女性像に自分を投影しながら、世間の金銭至上、実利主義という悪い風潮に乗らず、清らかな、純粹な心を持つべきだと、当時の女性への警告も窺える。

三、情深い女性

次に、子規が作った情深い女性像について考察する。

- 237 東京有女年破瓜 東京 女有り年 破瓜
深閨昼鎖繡簾斜 深閨 昼にして鎖ざし 繡簾斜めなり
娥眉淡掃又濃抹 娥眉 淡掃 又濃抹
芳姿裊如二月花 芳姿 裊として二月の花の如し
去年如花衣楚楚 去年 花の如く 衣楚楚たり
今年顔色老幾許 今年 顔色老ゆること幾許
鶯耶鶻耶春夏遷 鶯か鶻か 春夏遷り
玉階秋風聽虫語 玉階の秋風 虫語を聴く
一朝邂逅輕薄兒 一朝邂逅す 輕薄兒
相遇只恨相見遲 相遇いて只恨む 相見ること遅きのみを
在天比翼地連理 天に在りては 比翼地には連理
夜夜私語明月知 夜夜私語すること 明月のみ知る
薄情人間新聞紙 薄情なり 人間の新聞紙
既記隱事伝城市 既に 隱事を記して城市に伝う
現世多禍妾心決 現世禍多く 妾が心決す
一蓮同坐君許否 一蓮同坐 君許すや否や
吾孀橋上立三更 吾孀橋上 立ちて三更
躍入魚腹若為情 躍りて魚腹に入る 若為の情
夜霧濛濛燈火細 夜霧濛濛として 燈火細く

奔流碎月月有声　　奔流月を砕きて　月に声有り

「少女行」 明治十七年

まず、詩の形式は「行」である。「行」は楽府題であり、曹操の「短歌行」、杜甫の「兵車行」、白居易の「琵琶行」などはよく知られている。「破瓜」というのは女子の十六歳、男子の六十四歳を指す。「繡簾」は刺繍を施された美しい簾のことである。「娥眉」は美人の眉、また転じて美人の意味である。「二月花」は春の花である。杜牧に「霜葉紅於二月花」（霜葉 二月の花よりも紅なり）の用例がある。「一朝」はある日、ある時という意味である。「輕薄兒」は「輕薄子」と同じく、六朝の梁の沈約に「洛陽繁華子、長安輕薄兒」の詩句がある。この場合、全詩から見ると、ただ気の多いことを指して、不徳の意味を含めていない。「一蓮同坐」はあの世で同じ蓮のうてなに座るという意味である。「一蓮托生」というのと同じである。

この詩に用いられた詩句は白居易の「長恨歌」と似ている。例えば、「東京有女年破瓜、深閨昼鎖繡簾斜。」は「楊家有女初長成、養在深閨人未識。」（楊家に女有り初めて長成す、養われて深閨に在り人未だ識らず。）、「在天比翼地連理、夜夜私語明月知。」は「七月七日長生殿、夜半無人私語時。在天願為比翼鳥、在地願為連理枝。」（夜半 人無く 私語の時、天に在りては 願わくは比翼の鳥と作り、地に在りては願わくは連理の枝と為らん。）の変形だと考えてよからう。

次に詩の内容を見てみよう。大好きな人と何らかの原因で離れ離れになって、一年が経過したが、新聞に彼の死に関する記事を読んだのであろう。あるいは、親戚や友人がその記事の内容を教えてくれたかもしれない。好きな人が死んだことにショックを受け、思いが重なる苦しみもあって、急に老けた。独りで生きていくのは意味のないことだと思って、少女は好きな人を追って、自殺したという内容である。子規はこの詩の中で死を以て愛情への忠誠を示した情深い女性像を作った。

この詩で一番注目したいのはこの女性の身分である。詩に出ている場所、吾

孀橋^⑫のあたりは当時、遊里吉原を行き来する客が通っていた。名妓高尾が帰路につく馴染みの客を想って「君は今 駒形あたり ほととぎす」という歌を詠んでいるのはよく知られている。また、青年期の子規は他の男たちのように女郎買いをしていた。子規の友人である柳原極堂の話^⑬によると、明治十七年か八年の話である。子規に吉原に連れて行けと言われ、二人は青楼へ上った。翌朝、帰る途中に、子規は「吉原はまるで詰まらんところだね、あれでは詰まらん詰まらん」と繰り返していた。それに対し、柳原は「正岡は本で読んだ吉原文学のおいらん、美しいその遊郭情緒をその心に描いていった、ところが現実の吉原はいかにも殺風景であったので少なからず失望を感じたものに違いない。つまり、実利主義の吉原と正岡が想像したロマンチックな吉原が一致しなかったのだ。」と述べている。

この回想の中で明治十七年か八年という時期は以上の漢詩が作られた十七年という時期と合致しているため、詩中に出ている少女が一人の遊女であると十分考えられる。

現実の中では、子規は遊女に対して、嫌悪感を抱いていた。それについて、子規自身も『仰臥漫録』九月二十九日の項^⑭に、友人の古島一雄に伴われ、吉原に遊んだ話が綴っている。その翌朝、布団をかぶって相方と向かい合って旨そうに豆腐か何か食べていながら、居続ける古島を置いて、独り茶屋へ帰って、二階からしばらく往來を見ていると、病院でもいくのだろうと考えられる女が二人、「頭ハ大シヤグマ、美シキ内掛け着テ静カニ並ンデ歩ク後姿ニ今出タバカリノ朝日ガ映ツテ龍カ何カノ刺繡ガキラキラシテ居ル 之ヲ見テ初メテ善イ氣持ニナツタ 吉原デ清イ美シイ感ジガ起ツタノハ此時バカリダ」と子規は回想している。

子規は「女郎買」をしてもちっとも満たされなかった。薄汚れた醜悪な感じもした。それは、少年期の子規の性的衝動の否定とも捉えられる。漢詩中のこの遊女は実利主義の吉原遊女と異なって、愛する人のためなら死さえも恐れない人情のある女性である。それはまさに子規の理想上の吉原遊女のあるべき姿

だと考えられる。橋から川に飛び降りるのも悲しい結末であるが、一種のロマンチックさを感じさせる。このような結末は子規が想像した吉原の遊郭情緒と合っている。明治二十七年、子規が目黒の牡丹亭に遊びに行った時、給仕してくれた少女に「独り心を躍らして」、「藪のあるやうな野外れの小路のしかも闇の中に小提灯をさげて居る自分、小提灯の中に小石を入れて居る佳人、余は病床に苦悶して居る今日に至る迄忘れることの出来ないのは此時の趣である」^⑤と述べている。こうしてみると、子規は少年期から恋や肉体的満足よりあくまでもその場の趣を重視していた。

四、可憐な妹

妹について、「ようやく一九〇一年（明治三十四年）、病勢のつり、一時間でも苦痛なく安らかに臥していられることが唯一の希望とも吐露するような、肉体的はもちろん精神的に窮まった状況になってはじめて、介護者としての妹・律に筆が及ぶ」^⑥と阿木津英氏は述べている。しかし、子規の明治二十八年に作った漢詩の中に、それより六年ほども早く妹についてのものが見られる。

ここで、まず妹が出ている漢詩（関連する詩句だけを抽出し、そして、便宜上年代順に番号を付ける）を掲げよう。

- ① 526 妹年廿六嫁見去 妹は年廿六嫁して去らる
裁衣煮菜家事助 衣を裁ち菜を煮て家事を助く

「正岡行」 明治二十八年

- ② 529 収涙児侍母 涙を収めて 児は母に侍し
擎杯妹慶兄 杯を擎げて 妹は兄を慶す

「従軍得病稍癒而帰京」 明治二十八年

- ③ 539 柴門吾廬是 柴門 吾が廬は是れぞ
小妹点燭邀 小妹 燭を点じて邀う

「訪種竹君聴話詩而還」 明治二十八年

- ④ 595 塩梅小妹調 塩梅 小妹調え

「寒厨」 明治二十九年

漢詩の中では、気の利く妹が描かれている。例えば、①の「妹年廿六嫁見去、裁衣煮菜家事助。」と④の「塩梅小妹調」は妹が家事の手伝いをしている様子を述べている。また、②の「擎杯妹慶兄」の背景を簡単に述べておく。子規年譜、明治二十八年の項に、「十月十九日松山出発、廣嶋を経て須磨に至る。腰痛発して歩行困難なり。稍々癒ゆるを待ち、大阪、奈良に遊びて十月三十日帰京。」^⑦とある。この一句は子規が東京の根岸の住所に着いて、一家団欒し、食事をしている情景である。家族との死別という心構えをして出発した兄たる子規の生還してきた事に、妹が喜んで酒杯をあげすすめて祝する場面が描かれている。この時の子規はどのような気持ちであったろう。よほど喜んでいたに違いない。また、③の「小妹点燭邀」の背景について、子規年譜、明治二十八年頃の末尾に「年末帰京後、詩書を購入、詩作に耽る。本田種竹近くに寓居するを以て、益を得ること少なからず。」^⑧とある。この一句は本田種竹を訪ね、漢詩について話した後、妹が家の近くまで明かりをつけて迎えにきたことを述べている。漢詩における妹は気がきいて、勤勉で、人間味のある女性である。また、妹を貧乏な生活をしながら、気の利く勤勉な女性として描いている。いつも身近にいる妹が持つ女性像は前述した子規の意中の女性像にも繋がっていると考えられる。また、十代で二度離婚した律はまた、封建婚姻の犠牲者でもある。子規はこのような妹への愛情から、自由恋愛を唱えるようになったとも考えられる。

五、献身的な母

子規の母親・八重は松山藩有数の儒学者・大原観山の長女として生まれた。記録によると、取り柄のあまりない下級武士の後妻となり、不満もなさそうに貧しい生活を送っていた。その姿は古風でまさに漢学者の娘というイメージを持っている。幼くして父をなくした子規は母の愛しか知らなかった。女一人で子規兄妹を育てた母は漢詩の中でどのように詠まれているのかを探究したい。

まず、母が出ている子規の漢詩（関連する詩句だけを抽出し、そして、便宜
上年代順に番号を付ける）を掲げよう。

- ① 174 慈母在家矻矻勤 慈母 家に在りて矻矻として勤む
山重水復思紛紛 山重なり水復なり 思 紛紛たり
「秋雨懷郷」 明治十六年
- ② 171 故国慈親空入夢 故国の慈親 空しく夢に入り
郵亭小雨亦生愁 郵亭の小雨 亦た 愁を生ず
「神戸港」 明治十六年
- ③ 197 慈親為独在郷里 慈親 独り郷里に在るが為に
便覚一年如百年 便ち一年も百年の如きを覚ゆ
「歳晩書懷」 明治十六年
- ④ 385 相見萱草空寥落 相い見る 萱草 空しく寥落して
夜夜閨門待兒婦 夜夜 閨門に 兒の帰るを待て
病軀憔悴業未成 病軀憔悴 業未だ成らず
菽水何日奉慈闈 菽水何れの日にか 慈闈に奉ぜん
「秋日書懷」 明治二十一年
- ⑤ 529 収涙兒侍母 涙を収めて兒は母に侍し
擎杯妹慶兄 杯を擎げて妹は兄を慶す
「従軍得病稍癒而帰京」 明治二十八年
- ⑥ 526 阿嬢在堂年五十 阿嬢堂に在り年五十
鮮魚不薦帛不襲 鮮魚薦めず帛 襲ねず
阿嬢為兒憫孤寒 阿嬢 兒の為に 孤寒を憫れみ
兒為阿嬢悲無孫 兒 阿嬢の為に 孫無きを悲しむ
「正岡行」 明治二十八年

①の「慈母在家矻矻勤、山重水復思紛紛。」とは母親が勤勉に働く様を想像して、望郷の思いを表している。この年は、子規が松山中学校を退学して上京した年である。同年作った詩句は②「故国慈親空入夢」と③「慈親為独在郷里」で

ある。②、③の「慈親」とは両親のことであるが、ここでは母親のことを指す。この二句は母親のことが空しく夢にも出てきたことと、独り郷里に居る母親の姿を描写することによって、①と同様に望郷の思いを表現している。続いて、④の「想見萱草空寥落、夜夜閨門待兒歸。病軀憔悴業未成、菽水何日奉慈闈。」は明治二十一年の作である。「萱草」とは中国古代では母親を意味する草である。「諼草」とも呼ぶ。「慈闈」は母親の旧称である。十七歳で上京してきた子規の、まだ親孝行できていないことから、学業に励んでも、立身出世するまではまだ道遠いという焦りが窺える。⑤「収淚兒侍母」の「兒侍母」という詩句は兒が母に侍している姿勢を示している。⑥「阿嬢在堂年五十、鮮魚不薦帛不襲。阿嬢為兒憫孤寒、兒為阿嬢悲無孫。」は赤裸々な心情描写である。母上は五十歳になるが、新鮮な魚を食膳にのせることもなく、絹織物を着ることもない。子たる私の為に、私が身寄りなく貧しいことを憐れみ、子の私は母上の為に、母上の孫のないことを悲しんでいる。極めて寂しい詩作であり、事実、心境がありのままに直叙されている。この詩を作った明治二十八年、子規は日清戦争へ従軍して、一か月あまりして帰国途上船中で咯血したため、県立神戸病院に入院し、重態となって、九死に一生を得る体験をした。死と直面した子規は自分の人生を客観視して、母親に対し、不孝であると反省している。

分析した通り、漢詩の中では、夫を亡くし、一人で寂しく、子供のために苦勞している母親の姿が描かれている。これは前述した少年子規の閨怨詩に出てくる女性たちの形象と合致する。特に、子供を持つという女性像に母親を重ねて、子供たる自分も母親の寂しさを癒したいと思っていたのであろう。

母親への思いを通して、子規の女性に対する関心は深められたと言えよう。

六、勉強熱心な女学生

明治の「文明開化」という政策によって、庶民の娘も学校に入ることができた。子規はこのような女子生徒についてどのように捉えていたのか。まず、子規の関連する漢詩を見てみよう。

60 干戈全戢学斯文 干戈全て戢まりて 斯文を学び
 黽勉只求才気伸 黽勉して只求む 才気の伸ぶるを
 想像女兒成長後 想像す 女兒 成長の後
 家家必見断機人 家家 必ず見ん 断機の人を

「見学校女生有感」 明治十四年

「斯文」とは『論語』に出る言葉で学問の意味である。「黽勉」は励むことであり、「断機人」は『列女伝』に出ている「孟母断机」という典故に因んだ表現である。全詩は子規の当時の教育への感想を綴っている。戦争が全くおさまって学問をなし、務め励んでひたすら才気の進歩することを求めている。想像するに、この女子たちが成長した日は、どこの家にも必ず昔の孟母のように、子供に素晴らしい家庭教育を施せるのであろうと、子規は女子教育の未来に期待していた。明治十四年、政変があり、文部省により中学校の授業内容は大きく改革された。この詩を通して、子規の時代の変化に敏感に気づき、将来の女性の働きを見通せるという鋭さが窺える。富士川英郎氏は「このこととつながって、はるか後代の昭和の日本にいわゆる教育ママが多く出現するようになるうとは、もとより当時の子規や雲林の想像も及ばぬことであつたろう」⁹⁾と評している。

この詩の中では、子規は、知識を学んで、将来は絶対教育熱心な母親になれるという肯定すべき女学生の像を描いている。子規は十五歳にして早くも女子教育の必要性について気付いた。

終わりに

以上、子規の漢詩にある女性形象を考察した。明治時代には、日本特有の家族制度があり、男系長子に譲られる戸主は家を率いるものとして大きな権利を持っていた。また、儒教思想の影響も大きく極端な男尊女卑の考えも一般的であった。そうした生育環境から見ると、子規も当然従来の儒教思想を持っているはずである。しかし、子規の漢詩を読むと、子規の「女性を劣等視する、(中

略) こくに言へば奴隷視する、一人格として認めない」²⁰という河東碧梧桐の見解のような観念は見出せない。たしかに子規の背景には、子規と関連する女性の存在は希薄であるが、碧梧桐がいうように、「子規が異性を劣等視するから、子規に対異性の体験が稀れであったのか、それとも異性に対する体験が稀れであったから、自然冷酷に見くびったのか」²¹というような理解だけでは、子規の女性に対する意識を見尽くせるとは言えない。子規のほかの文学作品と異なり、漢詩を分析すると、子規の女性への深い思いやりという側面が見られる。子規は漢詩の中で寂寞たる女性、怨恨深い女性、夫思いの女性、子供を持つ女性、情深い女性、貧乏で勤勉たる女性、可憐な妹、献身的な母、そして、勉強熱心な女学生というさまざまな女性像を築いた。特に、子規は閨怨詩の女性主人公たちに、少年期、家を離れ、寂しい気持ちと自分への励ましも重ねながら詠んでいる。また、子規は自分の理想の女性について、他の文学形式では恥ずかしくて書けない恋に対するコンプレックスや憧れも、漢詩の中に綴っている。なお、漢詩の中では、身近にいる母親と妹への愛情も読み取れる。そして、現実にいる母と妹の姿は子規に女性への認識を与えたと十分考えられる。特に、子規の自由恋愛と婚姻の自由、女子教育に対する積極的な態度という先進的な思想形成までに繋がっていると見えよう。

【注】

- ① 閨怨詩の濫觴は帝舜時代の塗山氏の娘が禹を慕って作ったという塗山歌に遡ると言われる。また、『詩経』の中に「衛風 伯兮」などの十篇以上の思婦詩が見られる。漢代に至り、楽府詩に「有所思」、「白頭吟」などがあり、漢代末に編纂された「古詩十九首」の中にも、閨怨の情を詠んだ作品がある。六朝期には「閨思」や「春閨怨」などの作品も見られる。「閨怨」を正式に詩題として用いられたのは魏晋南北朝の時である。唐代に至って、閨怨詩の創作は盛んになった。
- ② 君寵を失った宮女の怨みがましい物思いを詠う詩。
- ③ 『詩経』の六義の一つ。漢詩の表現・修辞による分類の一つ。草や鳥など自然界の事物から歌い起して、それとなく人間世界にたとえる手法。
- ④ 李清照の「醉花陰」

薄霧濃雲愁永昼、瑞腦消金獸。佳節又重陽、玉枕紗廚、半夜涼初透。東籬把酒黃昏後、有暗香盈袖。莫道不消魂、簾卷西風、人比黃花瘦。(薄霧 濃雲 永き昼を愁い、瑞腦 金獸に消ゆ。佳節又重陽、玉枕 紗廚、半夜に涼 初めて透る。東籬に酒を把りて 黄昏の後、暗香の袖に盈つる有り。道う莫かれ 消魂せざると、簾 西風に卷かるれば、人は黃花比りも瘦せん。)

- ⑤『子規漢詩の周辺』 清水房雄 明治書院 1989年
- ⑥ 講談社版『子規全集』別巻二
- ⑦「子規の漢詩——叙景と述志をめぐって」 小室善弘 正岡子規の世界く特集——（作品の世界） 国文学解釈と鑑賞 55(2)
- ⑧ 題画詩は広義的に言えば、画家あるいは詩人が画を対象にして評価、吟味し、その画の描いている情景から作った詩のことである。この時の題画詩は画面から独立して、画の画面に書いていない。狭義的に言えば、画家が画を描き終えた時、自分、あるいは、詩人に頼んで、その画面に直接書いた詩である。
- ⑨ 月下老人とも言う。縁結びの神である。『続幽怪録』に関連する物語がある。また、『晋書・索紞伝』にある話から月下老と氷上人という言葉を結んで、結婚の仲人のことを月下氷人というようになった。
- ⑩ 紅葉はここではもみじのことではなく、媒酌人の意味である。その語源は宋の劉斧の『青瑣高議』に収録されている劉斧が書いた『流紅記』である。
- ⑪『子規全集』第十巻「婚姻」 p35 講談社 1902年
- ⑫ 吾嬬橋は東京都の隅田川に架してある十大橋の一つで、台東区花川戸町と墨田区吾妻橋一丁目とを連ねる。旧名、大川橋、安永三年（1774年）創架、明治二十二年鉄橋となり、関東大震災後、さらに改築された。（『新百科辞典』（三省堂））。
- ⑬「子規を語る」『子規全集』別巻三 p239 講談社 1902年
- ⑭『子規全集』第十一巻 p448 講談社版 1902年
- ⑮『子規全集』第十一巻「病床六尺」 p250 講談社 1902年
- ⑯「子規とジェンダー——女性蔑視と天然界へ向かうセクシュアリティ」 阿木津英（特集 正岡子規・柔らかな思想）国文学 解釈と教材の研究49(4)
- ⑰『子規全集』第二十二巻 講談社 1902年
- ⑱ 同上
- ⑲『子規全集』第八巻 p735 講談社 1902年
- ⑳『子規全集』第二十巻「子規の回想」 p703 講談社 1902年
- ㉑ 同上

* 討論要旨

谷川恵一氏は、「夫思いの女性」を詠んだとされる190番の漢詩について、この男女が夫婦であるとは限らないのではないかと発言した。発表者が「妾」は側室を表すという根拠を提示したのに対して、谷川氏は「妾」が女性の一人称であると指摘した。また、谷川氏は463番の漢詩の第5行について、良家の少女が主体的に配偶者を探しているとする解釈の根拠が不十分であると指摘した。谷川氏はさらに、237番の漢詩に登場する少女を吉原の遊女であるとする解釈の根拠は何かと質問した。発表者は「吾嬬橋」という場所が登場すること、およびこの漢詩が詠まれた時期と子規が吉原へ通った時期が一致することから、この漢詩に吉原遊女のイメージが反映されていると解釈できると回答した。谷川氏は当時の人々にとって漢詩は嗜みの一つであり、必ずしも自分の実体験を詠んだとは限らないため、まずは漢詩の内容を正確に把握したうえで、そこから読み取れる女性像と子規の実人生の関係を明らかにすべきであると述べた。